2014/09/27：東京自由大学

**人類の知的遺産：ベルクソン**

鶴岡賀雄

**Henri Bergson** (1859-1941)

主著

『意識の直接所与についての試論*Essai sur le donné immédiate de la conscience,*』（＝『時間と自由』）1889 [DI]；『物質と記憶*Matière et Mémoire*,』1896 [MM]；『創造的進化*L’Évolution créatrice*』1907[EC]

『道徳と宗教の二源泉 *Les deux sources de la morale et de la religion*』1932[DS]

他に

『精神のエネルギー*L'energie spirituelle*』(1919)；『笑い*Le rire*』　(1900)；『持続と同時性』　*Durée et simultanéité* (1922)；『思想と動くもの』*La pensée et le mouvant*　(1934)（論文・講演集1903～23）

没後刊行

*Œuvres*(1959)（全集）；*Mélanges*(1972)（全集補巻）；*Correspondances*(2002)（書簡集）；Cours(1890年代の講義録）

参考文献

市川浩『[人類の知的遺産〈59〉ベルクソン](http://www.amazon.co.jp/%E4%BA%BA%E9%A1%9E%E3%81%AE%E7%9F%A5%E7%9A%84%E9%81%BA%E7%94%A3%E3%80%8859%E3%80%89%E3%83%99%E3%83%AB%E3%82%AF%E3%82%BD%E3%83%B3-%E5%B8%82%E5%B7%9D-%E6%B5%A9/dp/4061453599/ref=sr_1_11?s=books&ie=UTF8&qid=1411461138&sr=1-11&keywords=%E5%B8%82%E5%B7%9D%E6%B5%A9) 』(1983)；杉山直樹『ベルクソン－－聴診する経験論』創文社2006；篠原資明『ベルクソン――〈あいだ〉の哲学の視点から』岩波新書2006；中村弓子『心身の合一－－ ベルクソン哲学からキリスト教へ』 東信堂 2009.

**☆晩年の宗教論を中心に、ベルクソン哲学の現代的意義（の有無）について考えたい。**

・ベルクソンはどのくらい「現代哲学」か？

自然科学、社会科学、社会の「世俗化」、を前提している。帝国主義～植民地主義～世界戦争を経験している。

近代西欧「哲学」の理念を信じている。西欧文明の伝統を信頼している。

→「現代思想」の入り口にはいる。が「ポスト・モダン」ではない。（自然科学の理解の限界、社会科学、歴史学の知識の限定）

→「哲学者」としては不滅

**Ⅰ　宗教論まで**：ベルクソン哲学の大筋

**◯『意識の直接所与についての試論』**

・ベルクソン哲学の出発点；思考法の確立

・真実在としての「時間＝持続」（としての意識）：

　　｛持続＝時間＝実在←直観～内感｝⇔｛概念＝空間＝仮構←理性～表象｝

・「根本的経験論」

**◯『物質と記憶』**：物質と精神の関係：緊張⇔弛緩

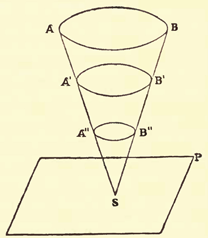
・世界は「イマージュ」でできている。（→ドゥルーズ：「経験的形而上学」の可能性へ）

Cf.ジル・ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』宇波彰訳、1966；『ベルクソン　記憶と生』前田英樹訳1975〔近年のベルクソン復興におけるドゥルーズの支配力・・・「内在」の哲学として（＝ＤＳの不在～敬遠）〕

・「精神」の、物質（としての知覚＝脳）からの独立；｛知覚⇔記憶｝の逆円錐

*→現代の脳神経科学、認知科学はベルクソンを乗り越えたか？*

・知性（知覚～認識）は生きる～行動するためのもの（⇔実在そのものの認識としての「哲学的直観」）。



**◯『創造的進化』**：「生vie」という存在次元；「D'où venons-nous ? Qui sommes-nous ? Où allons-nous?  我々はどこから来たのか？　我々は何者なのか？　我々はどこに行くのか？」

・進化：「人類」にまで到る「価値」の創造～増大；「意識（心）」の出現＝「自由」の増大。（「目的」は不定）

・「創造的進化」の原理～主体としての「生の飛躍運動(l’élan **vital**)」

*→現代の進化論はベルクソンの「創造的進化」であるか？*

・その根源としての「**神**」？？

「たくさんの世界が火花のようにして吹き上がってくるかのような壮大な花束、その吹き上げの中心、と私は言うけれども、それはただそれらしい譬喩similitudeを語っているに過ぎない。それも、絶え間なく吹き上がっているそのこと自体を言っているのであって、この中心をひとつの**ものchose**として示しているわけではない。」 (EC, 249)

⇒ここから、「倫理」の問題philosophie moraleが出てくるか（哲学者として、問わねばならない問い）→出ない！

**Ⅱ　時代状況と人生の中でベルクソンが問わねばならなくなった問い**：倫理（道徳）と宗教（神、死、善＝価値）

◯時代状況：第一次世界大戦＝近代西欧文明の危機（況や第二次世界大戦）

ベルクソン自身の、政治への関わりと、挫折。

Cf. Philippe Soulez, Bergson politique, 1989；*Bergson : biographie*, complétée par Frédéric Worms, 1997；François Azouve, *La gloire de Bergson,* 2007.

・科学技術の発展×帝国主義（国益主義）⇒大戦争、大量死

*→人類は戦争し続けるのか？*

◯ベルクソン自身のカトリシズムへの接近

Cf. ジャック・シュヴァリエ『ベルクソンとの対話』仲澤紀雄訳, 1959；中村弓子

*→現代人は神を信じうるか？　「死後」を信じうるか？*

**Ⅲ「宗教～神秘主義」論**

**○『道徳と宗教の二源泉』：**「神秘家mystique」の意義～要請

第一章「道徳的責務oligation morale」：道徳論。閉じた道徳～社会／開いた道徳～社会；道徳的英雄としての神秘家

第二章「静的宗教」：未開社会宗教論：生きるための幻想としての宗教

第三章「動的宗教」：神秘主義論：さらに次元を揚げて生き続けるための宗教

第四章「最後の諸考察――機械系と神秘系」：「現実問題」として考える。

・方法：（当初以来の）「経験主義」：実証科学（〔客観〕）の成果の全面的受容＋「人間の経験」の地平（〔主観〕）を見失わない

・第一主題：道徳～宗教論、及びそれと不可分の社会論。（神ないし超越界を主題とするのではなく）神～超越界との関わりにおける人間社会のあり方が主論題。

当時の科学主義～合理主義的宗教論：デュルケムフランス（宗教）社会学（→機能主義的宗教論、構造主義的社会論、さらに、近年の社会生物学、進化生物学、認知科学的宗教論）

・第二主題：危機的時代状況の中で、「人類」に向けて訴える！（第四章）

（「agitationの本を書きたい」）

・第三（かくれ）主題：ベルクソン自身にとっての探求の書。カトリシズムへのさらなる接近の前提。但し、「哲学」としての限界で止まる、止める。

**◯立論の基本構図：**

・「閉じた社会société close」とそれを支える「静的宗教religion statique」⇔「開いた社会société ouverte」とそれを可能にする「動的宗教religion dynamique」

両者の対比、関係を示す。（一～三章）

それにもとづいて、「人類」の直面する課題と展望を示す。

**◯「静的宗教」とは：**

・〔客観〕的＝科学的視点から

生物種としてのヒトhomo sapiensの特徴：「生への意欲」＋「知性(intelligence)」（生存～繁栄の武器；「認識は行動のため」）（昆虫の「本能」）

→知性活動の必然的独創の結果としての「エゴイズム」（反社会的個人主義）

→知性活動の必然的独創の結果としての「ニヒリズム」（失敗の可能性ゆえの不安、不可避な死を前にしての意気阻喪）

⇒知性の純粋行使の制限としての「幻想」＝「仮構機能・物語機能fabulation, fonction fabulatrice」＝社会集団（「閉じた社会」）を生存（「生存競争」の勝ち抜き）せしめるための「自然＝生命」の狡知としての「静的宗教」（タブー、精霊、神々、アニミズム、・・・）；「知性以下infra-intellectuel」（擬似本能）

・〔主観的〕内感の観点（内的経験）からは

「常識」「躾dressage」「規律」「責務devoir (“must”)」・・・；「～しなければならないから～する。」

「蟻の身になる」、「未開人になる」（批判的～反省的意識（＝生きるための現実的行動からの距離））の欠如＝意識を弛緩させる→自動行動）

「押されて動くpressure」

***⇒DSの問い：では、宗教は幻想か？　神は実在しないか？　死後の生はないか？　現代人に道徳はいかにして可能か？***

（問いの背景としての「現代の課題」；「文明化」した欧米社会は、未開社会に勝っているのか？）

１）個人的～社会的エゴイズム→社会秩序～世界秩序の崩壊＝戦争

２）倫理的退廃、深刻なニヒリズム（「生」の価値自体の不明化）

３）「知性の独走」を制御するはずの「宗教」の無力化

４）これに対抗すべき「知性主義的」倫理・道徳論の無力（「情熱～行動」につながらない）・・・

**⇒これを、救うものとしての「動的宗教」：「動的宗教」としての「（キリスト教）神秘主義」**

**○「動的宗教」とは：「神秘家mystique」（の宗教）**

・〔客観的〕科学的視点から

十九世紀以来の歴史学・宗教史学的「神秘主義」研究の隆盛：（ショーペンハウエル）、ジェイムズ、ジャネ、ロマン・ロラン、アンダーヒル、アンリ・ドラクロワ、・・・

・誰が神秘家か：パウロ、フランチェスコ、ジャンヌ・ダルク、シエナのカタリナ、アビラのテレジア、・・・；「イエス」は神秘家の範型としての「超神秘家surmystique」

Cf. Henri Gouhier, *Bergson et le Christ des Évangiles*,1966

・神秘家とは何者か：・「個人」である／　創造的行動者、道徳的英雄／　超「知性」者＝哲学的知性の他者にして牽引者／　情念～情熱の人、「生の力」（ｴﾗﾝ･ｳﾞｨﾀ~ﾙ）の体現者（受肉者）　／神秘家は、「開いた社会」のあり方を実践することで、その実現可能性を示す。　／天才génie＝英雄héro：突然「変異mutant」、「超人sur-homme」「人間以上plus qu’homme」、各自が一つの「種」としての神秘家　／生の根源（としての神）に「直接」して、人類の社会的生存をさらに進化させる可能性そのもの　／神秘家の行動の根源としての「愛の飛躍l’élan d’amour」

・〔主観的〕観点（内的経験）からは

哲学者ベルクソンを含めて、われわれは「神秘家の身にはなれない」。しかし・・

神秘家に魅せられることは、現にある。→「呼びかける」者としての神秘家（預言者的）

（「押される」のではなく、）憧れ、惹かれ(attire)、呼ばれ(appelé)、付き従うことで、（「知性」による合理的判断を越えて）行動する。（「義務」感から行動する（やりたくないけどやらなきゃならない）のではなく、「おもろい」から行動する、ので、エネルギーが涸渇しない。）

そのことが可能な根拠としての「知性の縁暈fringe」に残る「本能の残滓」（われわれの「生」の根源たるエラン・ヴィタールの、われわれ自身における存続）

アナロジーとしての「創造の努力」；芸術、音楽、舞踏、哲学・・

（行動の原理が、静的宗教～閉じた社会のそれとは「質的に異なる」。）

**○「開いた社会」**とは：

・輪郭～閉域をもたない。他者との区別によって自己を規定する「愛国主義」との質的区別。（荀子より墨子？）

・「人類愛philantropism」？　「人類」にも閉じない。動物にも、ETにも開く。（類を超えることで、人類に到達する。（SF哲学者ベルクソン）

**◯神秘家と哲学者の「協働」という理念；「実証的～経験的形而上学～神学」の可能性**

・宗教史上の「事実の線」の一致としての万教帰一主義。（但しキリスト教神秘主義が突出するエスノセントリズム。ベルクソン自身の信仰。）

・神とは：呼びかける力を持つのは、具体的個人（「人格」）でなければならない。（→呼びかける力の発信源としての「人格神」）→「愛自体」である神（神への愛＝神からの愛＝神）

・死後の生：物質としての身体（脳）と記憶（精神）の区別＋神秘家たちの証言の一致⇒死後生～来世の至福の「蓋然性」

**◯DSという本の境位**

・第二章と第三章の間に「学問的～哲学的知性」がある。この地点に、ベルクソン自身、また読者が立つ（ことが求められる）。彼らを「動かそうとする本」をベルクソンは書きたかった。

・哲学的直観と神秘主義的直観即行動が「協働」することによる、新たな形而上学の可能性；「哲学的知性」自体は変質変容しない？（「哲学の終焉」を言わない。）

・哲学と神秘主義の関係：哲学の他者～哲学の教導者～哲学の帰趨～哲学の憧憬

・知性者である哲学者に欠けている行動への情熱の「源泉」を、神秘家に「呼ばれる」ことで呼び覚まされる。知性は、知性を生んだ知性の源泉たるｴﾗﾝ･ｳﾞｨﾀ~ﾙに由来する。その残滓～縁暈が、知性活動の周囲には下意識的に残っている。それが再活性化される・・・。

但し、哲学者は神秘家にはなれない。自らが神秘体験するのではない。信者・フォロワーの神秘主義であって、神秘家の内感そのものの探求ではない。神秘家に憧れ惹かれる（「自らの内に反響echoを感じる」）経験の意味を探求する。学的批判的認識者（学者）と情熱的行動者（神秘家）の中間者として、二つの力の狭間で開いていく～開かれていく動きのありさまを自らの内にとらえようとする。

→神秘家に「呼ばれる」者としての「我々（哲学者）」の再定義；「呼びかけられている者l’appelé」という意識のかたち：内感される「憧憬」の「意識の事実」：（他者によって）惹かれ～憧れる力が自身の内から湧き上がることを自覚する：他律と自発の統合としての「愛」＝エラン・ダム～ル（愛の奔騰）：「価値」は、見出される＝創造される。

**Ⅳ 最後のベルクソン**

・カトリシズムへの接近

・遺言状

**Ⅴ ベルクソンはなぜ「神秘主義」と言ったのか？**　（「神秘主義」研究者としての私見）

★ベルクソンの神秘主義論のからの「神秘主義」の再定義

・「根源への回帰による現状からの逸脱」（DSの理論枠としての「二源泉（且つ一根源）」）

「エラン・ダム－ル」を体現する神秘家とは、宇宙的生の根源たるエラン・ヴィタールへの回帰によって、これまでのエラン・ヴィタールの成果から「逸脱」するかに見える新たな創造を成す。これによって、「エラン・ヴィタール」のこれまでの成果の意味が「回顧的・遡行的にrétroactivement変わり」、世界・宇宙・人類が、新たな相貌の下に見えてくる。

動的宗教の出現によって、歴史が変わる＝進む。

「実際を言えば、それら〔動的宗教出現以前の諸宗教〕を〔動的宗教を生む〕試行群へと、過去に作用を及ぼすかたちでrétroactivement、我々が変えるconvertissonsのである。」(229)

・「謎mystery」としての「神秘主義mystique」

「神秘家～神秘主義」は、「知性以上」であるから、知性の水準に留まる者（留まらざるを得ない者：学問的知性を含む）にとっては、依然として「（魅力的な）謎mystery＝秘義」として立ち現れる。神秘主義とは、「謎の魅惑に引き込まれていくことを肯定すること（謎を既知の枠組に還元しないこと）」である。

⇒「神秘主義」とは、「根源への逸脱」であり「謎の謎としての肯定」である。

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

**★テクスト**

(A)「要するに、社会的責務の根底に見出された社会的本能は、常に、どんなにそれが広かろうとも、閉じた社会を目指すものである。〔…〕それは、人類l’humanitéを目指すものではない。どんな大国であれ、国民・国家nationと人類との間には、有限le finiと無際限l’indéfini、閉じたものと開いたものとの間の距離の全体がある。」(27)

(B)「今日でも、私たちは自然に、また直接に私たちの親や同国人を愛する。しかるに人類愛l’amour de l’humanitéは、間接的であり獲得されたものである。前者には私たちは直通で行けるが、後者には、ある回り道をしないとたどり着かない。というのも、宗教が人間に、人間という種全体を愛するよう招くとすればそれはただ神をとおして、神においてなのだから。また同様に、哲学者たちが、人格の卓越した尊厳、万人が有する尊敬respectされる権利について、私たちに教え示すべく、人類というものに目を向けさせるのは、やはり、私たち皆がそれによって共同性を得ているところの〈理性Raison〉をとおして、〈理性Raison〉においてのみのことである。どちらの場合も、私たちは人類にまでは、家族や国家といった段階を追ってたどり着くことはない。一挙に、人類よりもっと遠くまで運ばれるのでなければならない。こうして私たちは、人類を終点として捉えるのではなく、人類を越えて行くことで、人類に到達しているのである。さらに、宗教の言葉に拠ろうと哲学の言葉に拠ろうと、愛であろうと尊敬であろうと、これは、社会的圧力la pression socialeのさらに上にかぶさってくる別の道徳un autre morale、別の種類の責務である。」(28-29)

(C)「どの時代にも、この完全な道徳が受肉したs’incarnait特別な人々が現れた。キリスト教の聖人たち以前にも、人類はギリシアの賢人たち、イスラエルの預言者たち、仏教の阿羅漢たち、などなどを知っている。この完全な道徳cette moralité complète、むしろ絶対道徳と呼んだ用がよいだろうものを得るためには、人々はつねにこうした人々を手本としたのだった。このこと自体が、すでに注目すべき事実であり示唆するところが大きい。このこと自体が、これまで問題としてきた〔閉じた・静的〕道徳とこれから検討しようとしている〔開いた・動的〕道徳との間にある、つまり極小と極大、両極端の間の、たんに程度の差ではない質的な相違について予感させてくれる。前者は、非人格的な諸定式formules impersonellesに引き戻されればそれだけ純粋で完全となるのに対して、後者は、それが十全なものとなるには、一人の模範となる特権的な人物に受肉するのでなければならない。前者のもつ普遍性は、なんらかの法loiが一般的に受け入れられていることに依拠している。後者のそれは、ひとりの模範を皆が倣び従うことla commune imitation d’un modèleに依拠している。

　聖人たちはどうして、このように多くの模倣追随者を生むのだろうか。どうして偉大な人物は、その背後に付き従う大衆を生むのか。彼らは何一つ要求しない。にもかかわらず彼らは獲得する。彼らは扇動を要しない。彼らはただいればいいのだ。存在自体がすでに呼びかけappelなのである。というのも、この点こそまさに、この第二の道徳の特徴なのである。自然的責務obligation naturelleが圧迫pressionないし後押しpousséeであるのに対して、完全で完成された道徳においては、呼びかけ・招きappelがそこにあるのだ。」（29-30）

(D)「私たちが〔音楽を〕聴いている間は、その音楽が私たちに差し向けてくるものの他は何も欲することができないように感じる。まさにそのようにして私たちは、行動する・行ずるagirのを休んで聴き入るのでないならば、自然に、また不可避的に、行動することになるように思える。音楽が表現するものが歓びであれ、悲しみであれ、憐れみであれ、共感であれ、私たちはそのたびごとに、音楽が表現するそのものとなる。私たちだけがではない。他の多くの人々が、いや、すべての人がそうなっている。音楽が泣いているときには、人類が、全自然が、一緒になって泣いている。真相を言えば、音楽がそうした感情を私たちのうちに引き入れるのではない。音楽はむしろ、私たちの方を感情のうちに引き込むのだ。踊りの輪に通行人を引き込むように。道徳の樹立者たちがすることもこのようなものである。生は、新しいシンフォニーのように、それまで思いもよらなかった感情を彼らの魂に響かせる。彼らは、私たちをも、彼らともどもこの新たな音楽のうちへと入り込ませる。そうして私たちは、その音楽を行動へと移していくのである。」(36)

(E)「[...]そうだとするなら、人間は、生のエランがそこからやって来た方向へと遡って、そのエランを取り戻すことで、失われてしまった〔生への〕信頼感confiance、あるいは反省のせいで揺らいでしまった信頼感を回復すればよいのではないか？　しかしそれができるとしても、それは知性によることではない。少なくとも知性だけによるのではない。知性はむしろ逆の方向に進んでしまおう。知性にはそれ固有の方向付けがある。知性が思弁へと高まるときわれわれに示してくるのはもっぱら諸々の可能性なのである。知性は現実そのものréalitéに触れるものではないのだ。だがわれわれは、知性の周りにはある直観の縁暈が、微かに、消え入りそうになりながらも、残っていることを知っている。それをはっきり捕まえて、強化すること、そしてなによりも、それを行動actionへと完成させることはできないだろうか。というのも、直観というものが純粋なヴィジョンになっているのは、その根源principeが弱まることによってであり、またこう表現してよいなら、直観自体にたいしてなされたある抽象作用によってのことなのだから。」(224)

(F)「自分を牽き拉っしていくことになる奔流に魂の深みで揺さぶられて、魂は自身の上で旋回するのを止める。種と個体とが相互に輪をなして規定し合うようにさせている法則から、一瞬離脱する。魂は、恰も自分に語りかける声を聞いたかのように、立ち止まる。そして魂は身を任せ、真っ直ぐに運ばれていく。魂は自分を動かしている力を直接知覚するわけではないけれども、その力の規定しえない現存を感知する。あるいは象徴的なヴィジョンといったものを通じて感じ取る。すると、なにか巨大な歓喜が押し寄せる。魂が呑み込まれる恍惚esctase、魂が被る脱魂。神ここに在し、魂は神の裡にある。もはや神秘mystèreはない。すべての問題は消滅し、晦冥さは霧消する。これが照明illuminationである。だが、それはどれほどの間のことだろう？　知覚できぬほどのかすかな不安定感inquiétudeが、この恍惚の上を漂っていた。それが降りてきて、影のように魂に取りつく。このことでもう、続く魂の諸状態を見るまでもなく、真正の神秘主義、完全な神秘主義と、それ以前の、これを予感していたにとどまる模倣態、ないし準備態だったものとを区別するのに十分なのだろう。たしかにこの不安定感は、偉大な神秘家の魂は恍惚をその道程の終着点として停止するものでないことを示している。これはたしかに休息である、と言ってよい。ただし、〔機関車〕が圧力〔蒸気圧〕を受けたままで停止している停車場のようなものだ。動力は、新たな発車進行を待機しつつその場で振動を続けている。もっと正確に言おう。神との合一は、どんなに緊密なものであっても、それが全面的でなければ最終的なものではない。思惟と思惟の対象との間には、おそらく、もう距離はない。両者の隔たりを測るものだった、あるいは隔たりそのものだった諸問題はもう消えたのだから。愛する者と愛される者との間の根本的な分離はもうない。神は現前し、歓喜は極み無い。しかし、魂が思惟と情感によって神に没入するとしても、魂の何かが神の外に残っている。それは意志である。つまり、そうした魂がなお行動するとすれば、それは魂だけに由来する行動ということになる。魂の生は、したがって、未だ神的ではないのだ。魂自身、このことを知っている。朧気ながら、その不安を感じている。そしてこの、休息のなかでのざわめきagitationこそ、我々が完全な神秘主義と呼んでいるものの特徴なのである。このざわめきが表現しているのは、エランはもっと遠くまで行くために摑まれていたということである。恍惚はたしかに、直視し感動する能力には関わってはいるけれども、まだ意志が残っているということ、そして意志そのものも、神の裡へと置き戻されねばならないということである。この感情senteimentが魂の全体を占めるまでに拡大するとき、恍惚は去る。魂は再びひとりになり、往々にして孤独感に捉えられるse désole。暫しの間目眩く光明に捉えられていた魂は、いまや闇の中で何も見分けられなくなる。魂は、自分の中で暗々裏に成し遂げられつつある深遠な仕事について気づかない。自分がもうだめになってしまったと感じてしまう。魂は、こうしたことは結局すべてを獲得するためのことなのだとは、まだわからないのである。こうしたものが、偉大な神秘家たちが「暗夜」として語っているものである。そしてこれはおそらく、キリスト教神秘主義にあって最も重要、そうでないとしても最も教育的意義の大きいところである。最後の決定的な段階が、偉大な神秘主義の特徴となることが、こうして準備される。この最後の準備の内実を分析することは不可能である。神秘家自身にとっても、その機序はほとんど見通せない。我々としても、次のように言うに止めておこう。とてつもないエフォートをなすべく構築された、すさまじく頑丈な鋼製のマシンがあるとする。それが、まさに組み立てられつつある時に自己意識をもったなら、おそらくこれと類比的な状態を感じることだろう。マシンの各部品は一つ一つ、最も厳格な試験に付せられる。部品の一部は取り除かれ、別のものに替えられる。するとマシンはそこかしこに欠落感を覚えることだろうし、いたるところに苦痛を感じるだろう。しかしこのまったく表層的な苦痛は次第に深まって、一箇の驚嘆すべき道具となることへの待望と希望へと溶け込んでいくべきものでしかない。神秘的魂l’âme mystiqueは、この道具となることを願うのである。そうした魂は、神が用いるためには十分に純粋でないもの、十分に頑丈かつ柔軟でないものを自らの本体から切り離す。すでに魂は、現前する神を感じてはいた。すでに、象徴的ヴィジョンのうちに神を知覚していると信じていた。すでに、恍惚のうちに、神と合一してさえいた。しかしそうした一切は永続するものではなかった。そうしたすべては観想contemplationでしかなかったからである。行動actionが魂を自分自身へと引き戻し、かくて神からは引き離したのだった。だが今や、神が魂を通して、魂のうちで、働いている。合一は全面的であり、したがって最終的définitiveである。ここに到れば、メカニズムとか道具といった言葉が喚起するイメージはもう捨てた方がいいだろう。これらは、準備作業というものの理解を得るためには役だったかもしれない。が、これらによっては、最終的成果については何もわからないだろう。その成果とは、以後は、魂にとっての、生の満ち溢れだ、と言おう。それは測り知れぬエランである。それは、魂をこの上もなく壮大な企図に向けて投げ放つ抗いえぬ衝迫である。その全能力の静謐な高揚によって、魂の視野は大きく拡がり、魂自身はどんなに弱くとも、力強く事を成し遂げていく。とりわけ、魂は事態を単純に見るようになる。この単純さが魂の言葉において、また行動において際立ってくる。それが複雑な事態の中でも魂を導いていて、魂は事の複雑さに気づいてさえいないかのようである。生まれついての英知、いやむしろ修得された無垢といったものが、こうして、事の始めから、有効な手順を、決定的な行動を、疑問の余地の無い言葉を、そうした魂に教えるのである。とはいえ、努力が、また忍耐や堅忍が無用なわけではない。しかしそれらは自ずから到来する。そうしたものは、働くとともに「働かれる」魂のうちでは、自ずと湧き出てくる。彼にあっては、自由自発が神の行動と合致しているのである。それは巨大なエネルギーを消費させはする。しかしそのエネルギーは必要とされるや直ちに備給される。というのも、このエネルギーのもととなる生命力の湧出は、生そのものの源泉から流れ出てくるのだから。いまやヴィジョンは遠く去った、魂が神性に満たされてしまって以来、神性は魂の外部に現れ出ることもないからだろう。そのような人を、彼がたち交わる多くの人々と本質的に区別するものはもはやなにもないかのごとくである。神に対しては受動的でpatients、人々に対しては能動的に関わるagissants*神の協働者adjutores Dei*のランクにまでその人を引き挙げた変容un changementは、本人だけがわかっている。この高挙から高慢が生まれるようなことは決してない。むしろ反対に、大いなるへりくだりhumilitéの人となる。彼が小さい者humbleにならないわけがあろうか。神との、ひとりとひとりでの、沈黙の語らいの中で、魂全部が融け入るのを感じたあの情動をもって、神のへりくだりとも呼べようものを確証できたのだから。」(243-246)

(G)「この〔神の〕本性natureは、哲学者が神秘主義を定式化しようとするなら、すぐに定義できもしよう。神は愛である。そして愛の対象である。神秘主義の寄与はすべてこのことに存する。この二重の愛について、神秘家が語り終えることはないだろう。彼らの記述に終わりがないのは、記述すべきものが表現不能inexprimableだからである。ただし、彼らの記述がはっきり述べていることがある。それは、神の愛l'amour divinは神に属する何かquelque chose de Dieuではなくして、神自身だということである。この教えにこそ、神を人格une personneとみなしつつも粗雑な擬人神観に陥りたくない哲学者は依拠することになろう。例えば、魂を燃え上がらせてそのすべてを呑みこみその全体を占めてしまうこともある熱狂enthousiasmeを考えてみよう。そのときには、その人の人格la personneはこの情動émotionとひとつになってしまっている。ではあるが、彼はこれほど自分自身であったことはなかった。彼は単純になり、一つになり、強く集中している。さらに彼は、これほどに思惟に満たされていたこともなかった。[...]この知性以下のinfra-intellectuelle情動とは反対に、この〔知性以上supra-intellectuelleの情動〕は意志に依存するものであり続けていた。この情動をとらえるためには、芸術家にはその都度ある種の努力が必要だった。すぐに夜の闇にまぎれてしまう星を見続けるのに似た努力である。この種の情動はおそらく、神秘家にとって神の本質そのものであるところの至上の愛に、はるか遠くからかもしれないが、類似している。いずれにせよ哲学者は、神秘家の直観内容を知性の言葉で表明せんとしてそれに一歩ずつでも肉薄しようとするならば、こうした〔知性以上の〕情動を考察するのでなければならない。」(265-268)

(H)「〔…〕なぜなら我々の身体とは、我々の意識が自らを当て嵌めている物質であるとするなら、身体は我々の意識と拡がりを同じくするはずであり、我々が知覚するすべてを包含するものである。それは星辰までも届いている。しかし、この広大な身体は、その中心を占めているほんの小さな部分がわずかに場を変えるだけで、たえまなく、ときに甚だしく変化する。この内的で中心をなす身体は、相対的に恒常性を保っていて、つねに現前している。たんに現前しているばかりでなく、活動している。我々がこの巨大な身体の他の諸部分を動かしうるのは、この〔中心の〕身体によって、ただこれによってのみである。そして行動こそが肝要なのだから、つまり我々は我々が活動している場所に存在するのだと思われているのだから、人は意識をこの最小の身体のうちに閉じ込めて、広大な身体を無視してしまうのが常である。」(274)

(I)「〔…〕精神の活動はたしかに物質と混じっているところはある。しかしそれは一部に過ぎない。残りの部分は無意識l’inconscientのなかに留まったままである。身体とはたしかに、我々が行動するための手段であるが、しかし同時に知覚を妨げるものでもある。その役割はどんな場合であれ、有益な行動を成し遂げるところにある。精確に言えば、身体の役割は、現在の状況に光を与えることのなさそうな記憶内容を、そして我々が関わりそうにない諸事物の知覚を、意識から排除するところにある。言うならば、フィルターであり遮蔽膜である。それは、現実化してしまうと行動の妨げになりかねない一切を潜在状態のままに留めておく働きをする。〔…〕身体は我々のために、夢の広大な領野から、現実の心理的生を摘み取ってくるのだ。要するに、我々の脳は我々の表象を産み出すものでも保存するものでもない。行動に資するようなかたちに表象をたんに限定しているにすぎない。それは*生への注意l’attention à la vie*のための機関なのである。しかるに、このことから帰結するのは、人間が行動のためには自然によって隠されたsoustraits à l’action de l’homme諸事物を、人の知覚から切り離すことを機能とする特別な仕組みが、身体のうちにであれ身体が限定している意識のうちにであれ、なければならない、ということである。そうした機構が乱されると、それによって閉ざされたままだった門がすこし開く。なにかが、おそらくは「あの世au-delà」でもあろうなんらかの「外部en dehors」から入ってくる。それは、「心霊科学」が研究している超常知覚に類するものである。〔…〕」(335-336)

(J)「このようにして我々に届けられるかもしれない情報はおそらく、魂の下級部分に、霊性＝精神性spiritualitéの最下層に関するものでしかないでもあろう。だがそれでも、人類の大多数に見いだせるもののほとんどの場合は言葉だけで抽象的で実効性を欠いているように見える来世への信仰を、生き生きした現実的なリアリティréalité vivanteへと変えるには、これ以上のことは必要ないだろう。〔…〕

たしかに、もし我々が確信していれば、死後の生が絶対に確かだと信じていれば、それ以外のことに思いを致すことはできなくなるだろう。この世の快楽はあいかわらずあるだろうが、生ぬるい味気ないものでしかなくなる。それがもつ強度とは、我々がそれにのみ集中していた注意関心に応じたものでしかなかったからである。そうした快楽は朝の太陽に照らされた電球の光のように色あせていくだろう。快楽plaisirは歓喜joieに被われて輝きを失ってしまうことだろう。」(337-338)

(k)「〔…〕いま人類は呻いている。自ら成し遂げた進歩の重みに半ば押し潰されている。自分たちの未来が自らにかかっていることが十分に解ってもいない。人類はまず、なお生き続ける意志があるのかをたしかめねばならない。その上で、ただ生きることだけを意志するのか、それともさらに、我々のこの障碍の多い惑星の上でも、この大宇宙が存在する目的la function essentielle de l’universを完遂するのに必須の努力をなすことをも意志するのかどうか、たしかめねばならない。この宇宙とは、神々を作り出すマシンなのである。」(338)